

通し番号	3718
------	------

分類番号	12-44-13-08
------	-------------

(成果情報名) 新規露地切り花セイヨウハナシノブの栽培方法の確立	
[要約] 新規露地切り花としてセイヨウハナシノブの栽培方法について検討したところ、9月下旬にセルトレイに播種、10月下旬に本圃にマルチ定植、定植後から翌春伸長期までの期間にべたがけ被覆を行うことにより、採花期間4月中旬から7月下旬、収量4200本/aが可能である。	
(実施機関・部名) 生産技術部	連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

県内の露地切り花栽培は、物日に合わせて出荷するキク、ケイトウが主力である。しかし、他地域に大規模産地が形成されたこと、消費動向が変化し物日の需要が低下したことから、新規作目への需要は恒常的にある。

そこで、露地切り花の新規作目として消費者人気の高い青花のセイヨウハナシノブの栽培方法を確立する。

[成果の内容・特徴]

- 1 は種時期：9月下旬と10月下旬播種を比較検討したところ、9月下旬は種において高い開花率及び採花本数を得ることができた(表1、2)。
- 2 本圃定植方法：露地圃場に直接播種する方法とセル成形苗を定植する方法を検討したところ、セル成形苗を定植する方法が開花率、採花本数ともに勝った(表1、2)。
- 3 冬季の管理方法：保温資材としてマルチ及びべたがけを検討したところ、マルチ・べたがけ処理を行うことによって、早春の萌芽直後の生育が旺盛になり、開花株数、開花率、採花数ともに増加し、開花開始時期も前進した(表3、4)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 セイヨウハナシノブは多年草であるが、耐暑・耐寒性が不十分なため枯死株が生じる。そこで露地切り花栽培にあたっては1年草として扱う方が効率的である。

[ 具体的データ ]

表 1 は種時期及び定植方法が収量等に及ぼす影響

は種時期	定植方法	採花本数			秀品率	切り花長
		1 aあたり	開花株あたり	秀品本数 <sup>z</sup>		
		本	本	本/a	%	cm
9月	直播き	1442	4.9	1197	83	71.5
9月	刈苗移植	5549	10.3	4162	75	70.1
10月	直播き	2298	6.3	1769	77	69.9
10月	刈苗移植	2689	7.3	2420	90	70.6

<sup>z</sup> : 切り花長40cm以下と曲がりなどのものを除いた割合  
被覆処理はマルチ+べたがけ

表 2 は種時期及び定植方法が開花に及ぼす影響

播種時期	定植方法	開花率 <sup>z</sup>	開花平均日
		%	
9月	直播き	63	5月23日
9月	刈苗移植	92	4月18日
10月	直播き	75	5月5日
10月	刈苗移植	63	5月14日

<sup>z</sup> : 2000年4月7日の生存株に対する開花  
被覆処理はマルチ+べたがけ

表 3 播種方法と被覆処理が収量等に及ぼす影響

定植方法	被覆処理	採花本数			秀品率	切り花長
		1 aあたり	開花株あたり	秀品本数 <sup>z</sup>		
		本	本	本/a	%	cm
直播き	無し	1124	5.8	856	76	71.4
直播き	マルチ	880	3.6	782	89	70.3
直播き	マルチ+べたがけ	2298	6.3	1760	77	69.9
刈苗移植	無し	880	5.1	391	44	77.4
刈苗移植	マルチ	1076	3.4	978	91	71.2
刈苗移植	マルチ+べたがけ	2689	7.3	2420	90	70.6

<sup>z</sup> : 切り花長40cm以下と曲がりなどのものを除いた割合  
播種時期は10月22日

表 4 播種方法と被覆処理が開花に及ぼす影響

定植方法	被覆処理	開花率 <sup>z</sup>	開花平均日
		%	
直播き	無し	42	5月22日
直播き	マルチ	50	5月17日
直播き	マルチ+べたがけ	75	5月5日
刈苗移植	無し	29	6月15日
刈苗移植	マルチ	54	5月27日
刈苗移植	マルチ+べたがけ	63	5月14日

<sup>z</sup> : 2000年4月7日の生存株に対する開花率  
播種時期は10月22日

[ 資料名 ] 平成 12 年度神奈川県農業総合研究所試験研究成績所 ( 花き・観賞樹 )

[ 研究課題名 ] 新特産花きの検索および栽培技術の確立 セイヨウハナシノブ栽培試験

[ 研究期間 ] 平成 9 年度から平成 12 年度

[ 研究者担当名 ] 勝間田やよい・渡辺茂